



## ★2020年1月～3月の予定★

### 【事務所関係者の動き】(異動等無し)

#### アンマン勤務

#### (JICAヨルダン事務所内)

宮原 千絵	所長(ヨルダン事務所長兼務)
柳 竜也	次長(ヨルダン事務所次長兼務)
今村 誠	職員(ヨルダン事務所兼務)
成田 英幸	職員
高島 淳	企画調査員
宮越 麻衣子	企画調査員
高井 史代	企画調査員

### 【公休日】

1月1日	年始休暇
1月2日	年始休暇
3月8日	Revolution's Day

### 「アハバール・カシオン」

#### ～名前の由来について～

「アハバール」とはNewsを意味するアラビア語。「カシオン」とはダマスカスの北に位置する旧約聖書にも記されている山の名前です。

## ●お知らせ

アハバール・カシオンは[JICAホームページ](#)からのみご覧いただけます。本ニュースレターは四半期に一度の発行です(原則4・7・10・1月を予定)。

## ●事務所から

2011年4月28日以降の関係者国外退避に伴い、JICAシリア事務所は現在JICAヨルダン事務所内に日本人所員執務所を設けています。

本号では、シリアおよびレバノンにおけるJICA帰国研修員同窓会による活動の報告のほか、280号で取り上げたダマスク・ローズについての続報(世界無形文化遺産への登録)等を掲載しています。

## ●事業報告

### シリア帰国研修員同窓会 活動報告 特別支援教育施設への教材支援

2019年の国連人道ニーズ概況報告(HNO)によると、シリアでは8年に及ぶ紛争により、約130万人もの障害を抱える人々が、爆撃の脅威にさらされたり、保健・教育・水道などの基本的な社会サービスを受けることができていません。障害を抱える子どもたちの多くは学校に通えず、車いすなどの補助具も手に入らないため、コミュニティからの排除、ネグレクト、差別などのリスクにさらされています。



供与された教材(色合わせ)  
で遊ぶ女の子

2019年度の活動計画に沿い、シリアJICA帰国研修員同窓会(JAAS)は、ダマスカス郊外県アルタル地区にある「Institute of Special Education for Intellectual Disability(知的障害を持つ子どものための特別支援教育施設)」と協力してプロジェクトを実施しました。

この施設では、ダウン症または知的障害を抱えている5～14歳の子どもたちを受け入れています。彼らは障害に加え、厳しい経済状況と低い生活水準に苦しんでいます。また彼らの家族も、子どもたちが基礎的な知識と日常生活スキルを習得するため、この施設に通わせること以外によりよい学習の機会を与えられないこと

に大きな悩みを抱えています。

プロジェクト実施前にJAASのメンバーが訪問した際には、施設側が子どもたちに必要な日常生活スキルを習得させることや、特別なカリキュラムに応じてわずかな学習機会を提供していることは確認できましたが、適切な教材や遊び道具が不足していることにより、子どもたちの学習意欲を引き出すことは難しい状況であると感じました。そこでJAASは、子どもたちに新たな教材やおもちゃ・楽器等を提供することで、学習意欲を向上させ、必要な知識やスキルの習得を促進するという企画を立案しました。



JAASのMousa代表(右)からカリキュラムを受け取るAfaf施設長

このアイデアを受け、施設では年齢と発達段階に適した教材やおもちゃの選定を実施。供与依頼を受けたJAASは、教材に加え子どもたちが科学的根拠に基づき学習していることを確認でき、教員が日々活用できる特別支援教育用のカリキュラムを印刷、配布することとしました。

2019年11月21日、JAASにより教

材(ゲーム、パズル、ブロック、絵本、ボード、動物模型、人形劇、楽器)とその他の関連物品が施設側に引き渡されました。供与された教材やゲームを使用している間、子どもたちはとても活発で、ブロックや絵本を通じて簡単なアイデアや情報を理解できたときは、喜びの表情を浮かべていました。Afaf施設長は、これらの教材は子どもたちをより能動的にし、自分たちがより気にかけていることを感じられたようだ、と話しています。さらに、子どもたちの家庭での様子にも変化が見られ、午前中に施設に行ったときの喜びは顔にはっきり表れていると、子どもたちの家族もまた、施設に対して感謝を伝えているとのこと。

シリアの子どもたち、特に障害のある子どもたちの笑顔と喜びは、

JAASが当初から取り組んできた目標であり、求め続けてきたものです。JAASのMousa代表は、シリアの一般市民が紛争の始まりから今日までに被った苦痛を和らげるために、必要なものを可能な限り提供できるように、JAASによる活動を続けてゆくと語りました。(マラハ・モラッド シニア・プログラム・オフィサー)



供与された教材

## ●事業報告

### レバノン帰国研修員同窓会 活動報告

#### 公立学校におけるデジタル教育のための環境整備支援

2019年度の活動の一つとしてレバノンJICA帰国研修員同窓会(Leba-JICA)は、山岳レバノン県シェーフ地区の公立学校と協力し、インタラクティブボード(電子黒板)を導入するプロジェクトを実施しています。

2019年12月22日、引き渡し式典が開催され、校長と教職員、JICAおよびLeba-JICA関係者、インフォマティクス専門家の専門家、デジタル教育導入の戦略に関わる事業責任者、電子情報技術関連企業の代表者や学校関係者など多くの参加者が立ち会いました。

開会式でのSamia校長のスピーチによると、今回のプロジェクトは、公立学校が受ける機材提供としては最も規模が大きい支援の一つと言えます。Samia校長は同時

に、「言葉で表すことは到底難しいが、学校関係者全員を代表して心からの感謝を表明したい」と述べました。

JICAシリア事務所関係者として出席したZeina在外専門調整員はスピーチの中で、「JICAは世界各国において、パートナーとともに基礎教育と中等教育の提供、教育における質の確保、学校運営の改善に貢献しています。持続可能な開発に不可欠な支援を提供するよう努めており、その中には良質な教育の提供および社会的平等の確保、そして目標達成のため関係団体の積極的な参加を促すこと等があります。」と紹介しました。

またLeba-JICAのJawdat会長は、本プロジェクトの重要性を強調し次のように述べました。「デジタル教育の知識は、将来のより良い職業選択のためのツールを子どもたちに提供するだけでなく、子どもたちの体系的、論理的そして健康的な思考方法を育みます。」

最後に、出席者は各教室を回り、実際に教師がインタラクティブボード



専門家によるデジタル教育に関する講話の様子

をどのように活用しているのかを見学し、新しく導入された技術が生徒の学習意欲にどの程度の影響を与えているか、その感触を確かめました。Leba-JICAは、近日中にレバノン国内の専門家を招き、ボード活用法に関する教職員向け講習を実施する予定です。(マラハ・モラッド)



設置されたインタラクティブボード



教室前に設置された看板

●離任挨拶

## マアッサラーメ！お疲れ様でした！

企画調査員

氏名：水野 真希

2年間の任務を終え、10月末無事に帰国いたしました。皆様には大変お世話になりましたこと、改めてお礼申し上げます。シリア案件にかかる様々な制約のなかで、シリアの人々にJICAとしてどのような支援ができるのか模索し続けた2年間でした。また、本部、事務所共に良い同僚に恵まれ、意見を出し合いながらチームの一員であることを実感しつつ活動できたことは、自身の成長にも繋がったと感じています。

長引く紛争の中で、国を守っていかうとするシリアの人々の底力と国力には大変驚かされます。いつか復興支援に関わることを夢見つつ、お礼の言葉といたします。

企画調査員

氏名：河合 正吉

2016年11月にシリア事務所企画調査員としてヨルダンに赴任して、すでに3年が過ぎてしまいました。任期中に一度は、ダマスカスに行きたいと思っていたものの、実現には至らず、ただ、ミドルイースト航空の機窓から遠くに見える街に、思いをはせる一方で、この空の下にいる人々の暮らしが少しでも良くなればと思いつつも、思うように手が届かない現実に、もやもやとしていました。JICAがシリアで活躍する日は、まだまだ、先なのかもしれませんが、その日が早く来ることを願っています。

任期中は、皆様には大変お世話になりました。紙面を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

●着任挨拶

## アハラン・ワ・サハラン！ようこそ！

企画調査員

氏名：宮越 麻衣子

2019年10月にシリア事務所企画調査員として着任しました。2016年から約3年間、シリア周辺国でのシリア難民支援事業にNGO職員として携わり、今回新たな地にてシリア支援に関わらせていただけることをとてもありがたく感じております。シリアへの支援は、今後の政治的進展の状況次第かと思われるため、慎重に状況を見守っていければと考えています。

これまでに出逢ったシリア人の友人・知人たちが、一刻も早く安心して祖国へと帰ることのできる時が来ることを切に願うと共に、その時にJICAとしてなすべきことが何であるのか、真に人々に必要とされている支援は何であるのかを明確なものとしてゆかねばならないと感じております。

企画調査員

氏名：高井 史代

2019年11月下旬に河合さんの後任として着任しました高井です。これまで主にアフリカやアジア地域で15年ほど国際開発支援などの業務に従事してきました。赴任のフライトに際して、隣の席にファルコンを連れてたおじさまがいて度肝を抜かれました。中東での業務はこれが初めてでドキドキしていますが、皆さんとてもアットホームな雰囲気です。お迎えくださいました。

シリアを取り巻く情勢は厳しいですが、これまで学んできたことを活かしつつ、中東の戦後復興・平和構築事業や人道支援事業に公民連携（PPP）手法を活用した案件が形成出来たら嬉しいです。これからよろしく願いいたします。

ダマスク・ローズ ユネスコ無形文化遺産に登録

ダマスカスの春の風物詩であり、産業の一つでもある「ローザ・ダマスケナ(Rosa Damascena)」（ダマスク・ローズの学名）。2019年にダマスカス近郊で植えられた総面積は約265㌔に上り、約35トンのバラが生産されました。

また2019年には、シリアでのバラ栽培と加工技術の独自性が評価され、「アル・マラハ村におけるダマスク・ローズの活用法と職人技術(Practices and craftsmanship associated with the Damascene rose in Al-Mrah)」としてユネスコ無形文化

遺産リストに登録されました。

これを記念し、ダマスカス市内のウマイヤド広場ではイベントが開催さ



無形文化遺産登録を記念してウマイヤド広場に設置されたモニュメント

れ、ダマスク・ローズとその経済的、医学的、美容的、文化的意義に関するドキュメンタリーが上映されるとともに、大きなバラを模したモニュメントがお披露目されました。

ダマスク・ローズとその加工技術がユネスコ無形文化遺産に登録されたことは、すべてのシリア人にとっての誇りの源となるでしょう。

(マラハ・モラッド)

\*ダマスク・ローズについては、[アハバール・カシオン第280号](#)「誇り高き花の女王・・・ダマスク・ローズ」にて取り上げています。



アラブ世界の木彫り工芸はイスラム文化の発展とともに生まれ、幾何学模様やアラビア文字を木面に彫り、富裕層の邸宅における扉や家具の装飾として人気を集めてきました。

◇木彫り職人：アブドゥルラフマン・アブハブラさん

「私のような伝統工芸の職人にとって、何よりも重要なものは制作に対する情熱だと思っています。

木彫りと出会ったのは幼い頃です。身の回りの何にでも興味を持つ年齢ですから、学校から帰れば工房に行き、どうやって作品を作るのかを見たり、それが生まれる空間を感じるのが好きでした。例えば職人たちがどうやってバラの花を、またはその他の美しい幾何学模様を描いていくのか。ハンマーでノミをたたく

音を聞きながら、その模様が木面に現れてくるのをずっと見ていました。子どもの頃この光景に親しんだことで、これを学びたい、できるようになりたい、と自然と考えるようになっていたんだと思います。

ダマスカス郊外の東グータ・サクバ・ハムーリヤなどのエリアを、私たち自身は『家具製作の首都』と呼んでいました。アメリカ、キプロス、イタリア、湾岸諸国など世界各地から人々が訪れ作品を購入してい



木製の額縁に木彫り模様を施すアブハブラさん



アブハブラさん制作の木彫りチェア

きました。紛争後はレバノンのベイルートに逃れた職人もいますが、多くはここヨルダン（アンマン）に移り制作を続けています。未だに海外からここまで買い付けに来てくれる方々も多いのです。

シリアで私の住んでいた地区は、現在は空白地帯となっています。もう伝統工芸はなに一つ残っていません。皆さんご存知のように、住人の大半が移住を余儀なくされました。ここ数年は誰もが、シリアの伝統工芸は消滅の危機に瀕していると感じています。」

ホームページ  
www.jica.go.jp/syria/index.html

お問い合わせ先 (E-mail)  
sr\_oso\_rep@jica.go.jp

お知らせ

アハバール・カシオンのバックナンバーは左記JICAホームページより閲覧いただけます。次号の発行は2020年4月の予定です。寄稿やお問い合わせはメールにて受け付けております。

編集後記

2020年になりました。今年はオリンピックイヤーということで、シリア事務所では柔道などのスポーツをはじめとした日本文化を紹介するデスクカレンダーを作成し、関係各所に配布しました。今年も引き続き、アハバール・カシオンをよろしく願いいたします。(成田)